

パリ国際ギター・コンクール1位(1969)

渡辺範彦

ギター・リサイタル

- 1977年3月19日(土)7時
- 那覇市民会館大ホール
- 主催・沖縄県ギター連盟
- マネージメント・沖縄良い音楽を聴く会



渡辺範彦

1947 宮崎県日南市に生れる。8歳よりギターを始める。松田二朗・月村嘉考氏に師事
1965・6 第8・9回日本ギター・コンクール第2位に入賞
1968 デビュー・リサイタル（東京文化会館小ホール）その後スペインに留学
1969 第11回パリ国際ギター・コンクール第1位、併せて審査員特別賞受賞
その後イギリスに渡り、D・ポールトン女史（リュート）にタブラチュアの演奏法等を師事
1970 第3回国際ギター・フェスティバルに招待を受ける（パリ市立テアトル・デ・ラ・ビュホール）。フランス各地で

1973 リサイタル
アメリカ・カナダ各地に演奏旅行
1974 「NHKテレビリサイタル」「題名のない音楽会」「私の音楽会」等テレビ出演。
東京バッハ・カンタータアンサンブル（小林道夫指揮）とヴィヴァルディの協奏曲を演奏
都市センター・ホール
コンラッド（リコーダー）とジョイント・リサイタル（ヤクルトホール）
1975 NHK・TV「ギターを弾こう」の講師で1ヶ年出演
ヨーロッパ各地へ演奏旅行
現在 各地のギター関係者の招待をうけ演奏活動を行なっている。
大坂晴夫氏に師事。上野学園大学ギター科講師

曲 目

チエロ組曲第3番BWV 1009	J.S.バッハ
リュート組曲第4番BWV 1006a	J.S.バッハ
♪ ♪ ♪	
パイパーのガリアルド	ダウランド
2つのメヌエット	ラモー
ベネズエラ・ワルツ	ラウロ
マドローニヨス	トローバ
アストゥーリアス	アルベニス
カバティーナ組曲	タンスマン

● チエロ組曲第3番

リュート組曲第4番

(J.S.バッハ)

バッハの作品は、今日のギタリストにとって基本的なレパートリーになっている。勿論大バッハ時代にはまだ今日のようなギターではなく、その前身であるリュートが広く使用され、そのリュートのためにバッハは組曲の他数曲作曲している。今日ギターで弾かれるバッハの作品は殆どリュートのための曲とヴァイオリン及びチエロの無伴奏ソナタ或はパルティータ(組曲)である。それらの原曲をバッハ自身がリュート用に編曲したり、フランシスコ・タルレガ(1652~1909)アンドレス・セゴビア(1893~)等、今日のギター音楽に貴重なルネッサンスをもたらした人たちが編曲したものである。ギターで奏でられるバッハは、バッハの音楽が要求するあらゆる繊細さ、力強さ、高貴さを持っている。すべての音符が手づくりで生まれてくる最も人間的なギターの音独特の美しさに、あらゆる好楽家が虚心に耳を傾けなければならないものを持っている。

「チエロ組曲第3番」は、有名な無伴奏チエロ組曲第3番のことである。全6曲ある無伴奏チエロ組曲は、これまで全てがギター用に編曲され、ギター音楽の最も大切なレパートリーのひとつになっている。この第3番(BWV 1009)は最も壮麗なものといわれ、前奏曲~アルマンド~サラバンド~ブーレⅠ・Ⅱ~ジーゲの古典組曲からなり、单旋律で書かれた部分が多いがギターで弾く場合、イ長調に移され多少の低音旋律・和声が補われ潜在的には豊かなポリフォニーの作品となっている。それぞれにバッハならではの瞑想的な趣きの曲となっている。

「リュート組曲第4番」は、これも有名な無伴奏ヴァイオリン・パルティータ第3番(BWV 1006)からバッハ自身がリュート用に編曲したものである。バッハのリュート曲としては、この第4番を含む4曲のリュート組曲と小規模な作品が3曲ある。この第4番は、前奏曲~ルール~ロンド風ガボット~メヌエット~ブーレ~ジーゲの古典組曲からなり、哀愁の余韻をひく曲想の中でバッハのパルティータとしてはやや変った構成さもち、生き生きとした楽想と独創性に益れている。また、バッハが自作品を演奏楽器を厳密にしなかった頃にリュート組曲して書き上げたのは、リュートという典雅な古楽に対する感じかたを示したものといえる。

● パイパーのガリアルド

(ダウランド)

ジョン・ダウランド（1562～1626）は、イギリスのエリザベス王朝時代、最高のリュート奏者、歌手としてヨーロッパ全土に名声のあった音楽家である。オックスフォード大学で音楽を修め、後に王室付リュート奏者になった。一方リュート曲やリュート伴奏付歌曲の作曲家としての功績も大きい。美しい旋律と和声、独立性の高いリュート伴奏の書法は時代を抜きんで、近世の芸術歌曲の扉を開いた。彼の作品は400年後の今日でも愛唱されている曲が多く、特に「涙のパヴァーヌ」は有名である。

ガリアルドとは、パヴァーヌの後に踊られる舞曲で、気まぐれな陽気な踊りである。ダウランドは全部で27曲のガリアルドを書いている。この「パイパーのガリアルド」はその中でも代表的なもので、「パイパー」とは人名であるともバグパイプの奏者を意味するものとも言われている。

● 2つのメヌエット

(ラモー)

ジャン・フィリップ・ラモーは1683年フランスに生れた。教会オルガニストの父より音楽を学び、19歳で自ら教会オルガニストの地位についた。クラブサン曲集第1巻発表の後、父の後を継いでノートルダム大聖堂のオルガニストとなり、ここで有名な「和声論」を発表し世の注目をあびるようになった。その後自作のオペラの成功により名声が高まり、フランスの代表的作曲家としての地位を不動のものにした。作曲だけでなく理論家としても秀れた著書を残している。彼の作品は、当時の旋律性、装飾的な洗練よりも、より近代的な和声的表現をもっており、バッハなどにも大きな影響を与えた。

「2つのメヌエット」は、クラブサン曲集よりの編曲で、多くのギタリストに愛好されている。

● ベネズエラ・ワルツ

(ラウロ)

アントニオ・ラウロは1919年ベネズエラに生まれた作曲家で、最近とみにギター曲で知られるようになった。彼の作品には、ベネズエラの民謡やポピュラーな旋律をもとにした舞曲風な曲が多い。

この「ベネズエラ・ワルツ」は、中でも広く愛好されているもので、ワルツとは言っても単純な $\frac{3}{4}$ 拍子だけではなく、 $\frac{6}{8}$ 拍子を含んでいるのが特徴で、リズム的に獨得の味わいをもっている。本短調ふ、ア + 且細ハタナリ一 オの上ナニナナナハトナリトナリ ンタルな情緒を湛えた小

● マドローニヨス

フェデリコ・モレノ・ルガニストで、トローバはじめはオーケストラの作曲家として名を成した（今年1977年春来日て以来、自らもギターをの作曲家で、伝説や民謡素が強く出ている。この

と、スペイン的な色彩感に溢れた傑作である。

● アストゥーリアス

(アルベニス)

イサーク・アルベニス(1860~1909)は、スペイン生まれのピアニスト・作曲家。幼い頃から姉にピアノを習い、6歳の時には公開演奏をやってのけるという天才ぶりを示した。さらに作曲家としては、20歳の時に自作品のみによる演奏会を開き好評を博した。彼はドビッシーやデュカス等の影響を受け、近代スペイン国民楽派の代表的作曲家となった。彼自身天才的ピアニストであったため、ピアノ曲に多くの傑作を残している。彼がギターを愛していたこともあり、リズミカルな躍動感と甘美な抒情性をもったその作風は、多分にギター的なイディオムを持っており、今日彼のピアノ曲の多くは、ギター音楽の重要なレパートリーとなっている。

「アストゥーリアス」は、ピアノ曲「スペイン組曲第1集」の第5曲で低音に始まるメロディーとその伴奏音は激しい情熱をかきたて、中間部の歌はフラメンコの哀愁をたたえ、その両者の対比が見事に表現されている。「アストゥーリアス」とは、スペイン北部ビスケー湾に面する地方の名で、イスラム教の侵入に対するキリスト教徒の根拠地であった。この曲はその伝説にもとづくものである。

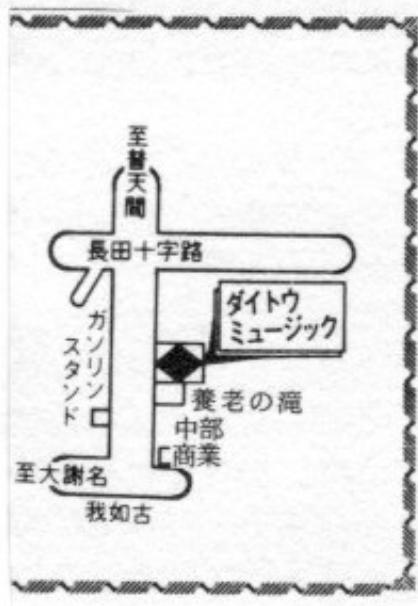
● カバティーナ組曲

(タンスマン)

アレクサンドル・タンスマンは1897年ポーランドに生まれた。ロッズ音楽院、ワルシャワ音楽院で学び、ピアニスト、指揮者としても活動している。21歳の時、ワルシャワ音楽コンクールで彼が仮名で参加した曲が第1位と第2位を獲得したというエピソードもある。彼は自国の偉大な音楽家ショパンの強い影響を受けて作曲を始め、後にラヴエルやストラビンスキーの影響も受けた。彼の曲は、理知的な構成の中にポーランド音楽の斬新な感覚を秘めている。特に叙情的な感性とメランコリックな表現にだけ、その東欧的気質は他の作曲家には見る事のできないものである。

「カバティーナ」とは、「小曲集」という意味で、1951年にシェナのアカデミア・キジアーナの国際コンクールで第1位を得た作品である。曲は巨匠アンドレス・セゴビアに捧げられている。

I) プレリュード II) サラバンド III) スケルツィーノ IV) バルカラーレ(舟唄)という構成で、彼のギター曲の中でも特に彼自身の個性を伝える曲としてよく演奏されている。



〈1億人のお客様にご利用いただきました〉

大きな翼

トライスター



毎日地球を7周

年間旅客数 国内第1位 世界第7位

今日も東京へ…… 9:00 12:15 17:20の3便



お問い合わせ 0988-53-5111

さあ、会いたくなったら、会いに行こう

